

魔術

登場人物

◆東家

東麻由美

東直美(母)

◆劇中の人物

魔術師ミスラ

魔術師の弟子 1 ～10

網野亜美

西条美里

学校の生徒たち

魔術

◆東家

そこは東家の一室。

麻由美が学校から帰ってくると、母は机に座ってコンピュータに何か打ち込んでいる。

麻由美　ただいま。

母　[コンピュータの画面を見つめたまま]おかえり。

麻由美　ママ。ちょっといい。

母　(うん)何？[画面を見つめたまま]

麻由美　…

母　麻由美にも彼氏ができたか？いいよ、もう中学生なんだから、うちに連れておいで。

麻由美　そんなんじゃないかって。

母　何？

麻由美　うん。[麻由美が母に話しかけようとしたその時]

母　[ここで初めて麻由美を見て]それにしてもひどいね。ネットいじめってやつ。

麻由美　…

母　頼まれちゃってさ。人権何とかって集会があって、そこで劇を上演するから脚本書いてくれって。テーマは「ネットいじめ」。主催者が資料をどっさり送ってくれたんで、それ読んだんだけど、ひどいもんね、ネットいじめ。こんなのにな手を染めるやつは悪魔ね。そう思わない。

麻由美　うん…

母　で、何？

麻由美　うん…いいの。何でもない。

母　どうした麻由美。このところちょっと元気ないぞ。ほら、スマイル、スマイル。

麻由美　[微笑む]

母　そうそう、そうこなくっちゃ。ママ、麻由美の笑顔見ると、がんばろうって思えるんだ。麻由美の笑顔はママのエネルギー源。

麻由美　[微笑む]

母　(あっ)麻由美、ママが書いた話見てくれない。まだ、途中までしか創ってないんだけど。[プリントアウトされた原稿を渡して]。ぜひ、演劇部に入った麻由美のご意見を伺いたいものです。

麻由美　これ、誰が演じるの。

母　地元の中学生を集めて上演するんだって。

麻由美　(ふーん)

母　(あっ)麻由美も希望してみたら。演劇部員なんだし。

麻由美　やだ、ママの劇やるなんて。ママの劇っていつも暗いし。

母　ママ、プロなんだよ。ただ単にハッピーエンドっていう劇はプロとして創りたくないんだよね。

麻由美　でも世の中にはそんな劇たくさんあるし、そっちの方が人気出るじゃない。それにハッピーエンドの劇を創っている人たちもプロでしょ。

母　そんな人たちは、プロの仮面をかぶった人間を観る目が甘い偽物。

麻由美　そうかな…

母　麻由美もそのうちわかるって。まっ、とにかく読んでみてよ。

麻由美が原稿を読む。

麻由美　『魔術』…これがタイトル？

母　そっ。

麻由美 ネットいじめと魔術ってどんな関係があるの？

母 読めばわかるって。

★魔術

麻由美 [ト書きを読んでいく]舞台は今にも壊れてしまいそうな古ぼけた館の大広間。その館の主人は、マティラム・ミスラという魔術師。ミスラは百歳を超えていると噂されているが、定かではない。芥川龍之介が彼のことを小説にした時、彼は若い魔術師として描かれた。しかし、現在の彼には年老いたという言葉がふさわしい。彼の後ろには十人の弟子が控えている。その彼の元に、一人の少女が訪れる。少女の名前は網野亜美。

舞台には麻由美が母の脚本を読む時に、麻由美が思い描いた世界が現れる。

ト書きが読まれる中で、舞台に魔術師ミスラとその弟子十人、続いて網野亜美が現れる。

麻由美と母、そして脚本に描かれた登場人物は舞台上で共存する。

弟子1 ミスラ様に、何の用だ。

弟子たち 何の用だ。

亜美 願いがあって来ました。

弟子2 帰れ。

弟子たち 帰れ。

弟子3 ここはおまえのような小娘の来るところではない。

弟子たち 来るところではない。

亜美 お願い、私の願いを聞いてください。あなた魔術師でしょ。魔術を使って願いを叶えてください。

弟子4 ミスラ様の魔術は気高いものだ。

弟子5 おまえの願いを叶えるために魔術は存在するのではない。

弟子たち 存在するのではない。

亜美 私のために来たんじゃないの。

弟子6 おまえのためではない？

弟子7 それでは、誰のために来た。

弟子たち 誰のために来た。

亜美 友だちのため。私の大切な友だちのため。助けてあげて。

弟子8 ミスラ様は忙しい。

弟子9 おまえの話を聞くひまなどない。

弟子たち ひまなどない。

亜美 美里、死にたいって言ってる。助けてあげなかったら、死んじゃうかもしれない。

弟子10 帰れ。

弟子1～5 帰れ。

弟子6～10 帰れ。

弟子たち 帰るんだ。

魔術師 まあ、まで。

弟子たち ミスラ様。

魔術師 名前は？

亜美 網野亜美です。

魔術師 網野亜美か。面白い名前だ。

亜美 …

魔術師 話を聞こう。

亜美 ほんとですか。

魔術師 ただ、話を聞くだけだ。助けるとは言っていない。

亜美 …

魔術師 どうする。話すのか、それとも話さずに帰るか。

亜美 話します。私が助けたいと思っているのは、西条美里。私の親友。彼女は今いじめに苦しんでいます。

魔術師 どんな風に。

亜美 これ見てもらっていいですか。

そうやって弟子の一人に携帯電話を差し出す。

魔術師 何だ、それは。

亜美 学校裏サイトに書き込まれた、彼女の悪口です。

弟子1 「1年B組のMS超うざい」

弟子達は携帯電話を次々と回していく。

弟子2 「殺した人には賞金あげます」

弟子3 「クラス全員が、MSのこともいって思ってるよ」

弟子4 「クラスじゃない学年全員だよ」

弟子5 「学校全員の間違いじゃない」

魔術師 [その携帯電話を手にとって]読むだけで気持ちが悪くなる。

亜美 毎日毎日、書き込みが続いてるんです。美里、これ読んじゃって。学校に来れなくなっちゃって。昨日、電話がかかってきたんです。美里から。

美里が現れる。

美里と亜美は携帯電話で話をする。

美里 亜美、あたしもう駄目。死んじやいたい。

亜美 美里。何言ってるの。だめだよ、死んだって何も変わらないよ。

美里 変わるよ。もう、嫌な言葉に触れなくなっすむ。いじめられなくなっすむ。

亜美 そんなの見なきゃいいじゃない。気にしちゃだめだよ。

美里 でも、クラスみんな見てるんだよ。だから学校行っても誰もあたしと話してくれないじゃない。亜美と話せるのも電話だけ。あたし息が詰まりそう。苦しくって、苦しくって。

美里は泣きながら退場。

亜美 美里、電話の向こうでずっと泣いてた。このままじゃ美里、ほんとに死んじゃうかもしれない。だから、助けてあげたいの。でも、どうしたらいいかわからなくって。それで…

魔術師 私を訪ねてきた。

亜美 はい。

魔術師 わかった。助けてやろう。

亜美 ほんとですか。

魔術師 おまえの友だちを助けてあげればいんだな。

亜美 はい。

魔術師 明日の朝、おまえの友だちに対してのいじめはなくなる。書き込みも全てなくなる。

亜美 ありがとうございます。

魔術師と亜美が去っていく。

◆東家

麻由美が脚本を机の上に置く。

麻由美 魔術師、ずいぶん簡単に解決させちゃうんだね。

母 うん。

麻由美 ママの脚本、ここで終わってるけど。これで終わりじゃないよね。

母 一応、ここに[自分の頭を触って]続きはあるんだけど。

麻由美 どうせ、ハッピーエンドにはならないんでしょ。

母 まあね。人権の集まりで上演する劇でしょ。最後は見てる人たちがネットいじめって何だろうって、考える劇にしないとね。

麻由美 ハッピーエンドでも、みんな考えるようにならない。

母 ママはそう思わない。ハッピーエンドだと考えがそこで止まっちゃう。

麻由美 私はハッピーな終わり方がいいな。

母 麻由美、続き聞きたい。

麻由美 あんまり、聞きたくない。

母 そんなこと言わないで、聞いてよ。ママの物語の続き。

麻由美 はいはい。

★魔術

母 [母が語るドラマを、麻由美はイメージする。そして麻由美がイメージした世界が舞台上で表現される]翌日、亜美のところに美里から電話がかかってくるの。とっても明るい電話が。

亜美が現る。

亜美が携帯電話を取る。それは美里からの電話である。

美里が現れ、携帯電話で話し始める。

美里 (あっ) 亜美。

亜美 美里、どうしたの、こんなに早く。

美里 亜美、聞いて。信じられないことが起こった。消えてるの、書き込みが全部消えてるの。それだけじゃない。ずっといじめの中心だと思っていた、浦野から電話がかかってきたの。今までごめんって。今日からまた仲良くしようって。

亜美 魔術がかかったんだ。

美里 えっ？

亜美 なんでもない。美里、よかったじゃない。

美里 (うん) 今まで心配かけてごめんね。

亜美と美里が舞台から去る。

◆東家

麻由美 ハッピーじゃない。

母 ここまではね。

麻由美 この後どうなるの。

★魔術

母 亜美が学校に行くと、教室で美里いじめの中心だった三人がとっても楽しそうに話してるの。でも三人は亜美を見ると、にやって笑って、教室から出て行ってしまう。三人だけじゃないの。どの子どもどの子もみんな亜美が近づくとさっと廊下に出してしまうの。亜美は一人教室に取り残されてしまう。そこに美里が入ってくる。さっき電話で明るく話した美里が。

美里が現れる。

亜美 よかったね、美里。

美里がにこっと笑う。

亜美が美里に近づこうとしたその時、「美里！」という言う声が廊下から聞こえてくる。

美里 亜美、ごめん。あたし、ちょっと用事あるから。

美里が廊下に出て行く。

母 一日中誰とも話ができなかった亜美は、家に帰るとすぐ携帯電話を取りだして裏サイトをのぞいてみるの。そこには、亜美の悪口がたくさん、たくさん書き込まれていた。亜美は、裏切られた気持ちで一杯になって、魔術師ミスラのところに向かうの。

舞台上に魔術師ミスラとその弟子が現れる。

亜美 ひどい…ひどい…

魔術師 何がひどい。

弟子たち 何がひどい。

亜美 [携帯電話を差し出して]これ…

その携帯電話の内容を魔術師の弟子たちが見る。

弟子たちの表情から、それがどんなひどい内容かが理解できる。

ただ弟子たちはそれを見て笑っている。

最後に魔術師ミスラがそれを見る。そして笑う。

弟子の一人が携帯電話を亜美に返す。

亜美 ひどい…ひどい…

魔術師 おまえの願いは叶ったはずだ。

弟子たち 叶ったはずだ。

魔術師 そして、おまえの友だちのいじめはなくなった。おまえの願い通りに。

弟子たち 願い通りに。

亜美 こんなことになるなんて…

魔術師 おまえは私が何も知らないとも思っているのか。私は魔術師。おまえの考えは、初めからわかっていた。

亜美 …

魔術師 おまえは本当に友達のために私を訪ねて来たのかな。

亜美 …

魔術師 おまえはおまえのために私のことを訪ねて来たのではないのか。

亜美 私は美里のことを心配して…

魔術師 いや、おまえが心配したのはおまえ自身だ。おまえの友だちの美里が死にたいと言ってきた。もしそれが本当になればおまえは困ったことになったはずだ。なぜなら、彼女の悪口を最初に取り消したのは、おまえなのだから。テストでおまえよりずっといい点数を取っている美里が、「どうしよう、こんな点数じゃ生きていけない」とおまえに言ってきた。それに怒りを覚えて学校裏サイトに書き込みをした。「一年B組の西条美里、ちょっと勉強できるからって調子にのんじゃねーよ」。そうだな。

亜美 …

魔術師 そして、その書き込みが次なる書き込みを呼び込んだ。

弟子1 ミスラ様、それは本当ですか。

弟子2 何と恐ろしい。

弟子たち 恐ろしい。

魔術師 もし彼女が死を選べば、警察によって書き込みが調べられる。そうすれば、おまえが書き込んだこともばれてしまう。おまえはそれを心配して私のところに来た。違うか。

亜美 私は…私は…

亜美は泣き崩れる。

魔術師たちが舞台から去っていく。

亜美は舞台上に倒れた形で静止する。

◆東家

麻由美はその亜美を見つめている。

母 麻由美、ありがとう。

麻由美 (えっ)

母 麻由美に話す前は、こんなにラストがはっきりしてたわけじゃないんだ。正直言うと、どうしようか迷ってたの。でも、麻由美に話したら、ラストシーンが目の前に浮かんできて。(あっ)忘れないうちにメモ取っとかなくちや。[そう言って、メモ帳にメモを取り始める]ラストで、主人公の亜美は崩れ落ちる。その後ろから、魔術師とその弟子たちの笑い声が響く。そしてその笑い声の中、幕。

母はそこまで書いて「ふっ」っと息を吐く。

麻由美 ママ、ママはそのラストシーンで何を伝えたいの。

母 この世に魔術なんて存在しない。世の中そんなに都合よくはできてない。ママが言いたいのは、そういうこと。書き込んでしまったものはそう簡単に消すことはできない。だから、書き込んだじゃだめなの。それがママのメッセージ。

麻由美 それじゃ、書き込んだ人はどうしたらいいの。

母 書き込んだことで誰かに苦しみを与えたんだから、それに見合う苦しみを味わうしかないじゃない。自業自得。

麻由美 …ママらしいね。残酷で。

母 でも、その方がネットいじめの怖さは伝わるでしょ。なんか気分が乗ってきた。

母が物語の続きを作るためにパソコンに向かって、キーボードを叩き出す。

麻由美 ママ、

母 [キーボードを叩き続けている]

麻由美 ママ、

母 ちょっと待ってて、今、気分が乗っているんだから。

麻由美 ママ、

母 麻由美、お願い、後にして。

麻由美 …

麻由美が泣き出す。

母が顔を上げて麻由美を見る。

母 麻由美…

麻由美 ママ、どうしてママは人の悪いところばかり見つめるの。私、息が詰まりそう。

母 …

麻由美 ママはいつも、残酷な話書いて、現実を書いているって言ってるけど、そんな残酷なことだけ

が現実なの？悪いことを見つめることがプロの仕事なの？ママの劇、いい人一人も出てこないじゃない。亜美は友だちのためと嘘ついて、自分のために魔術師かなえてもらいに行く。魔術師は亜美に苦しみを与えて笑っている。今までいじめで苦しんでいた美里は、親友だった亜美を無視するようになる。

母 …

麻由美 ママ、助けてあげてよ。亜美を。

母 …

麻由美 ママ、書き込んだ亜美も人間なんだよ。

母 ママは、弱い人の側に立ちたいの。被害を受けて苦しんでいる人の側に立ちたいの。

麻由美 亜美は、自分が助かりたくって魔術師のところに行ったんじゃない。亜美は本当に助けたかったんだよ。美里のことを助けたかったんだよ。

母 亜美はそんな子じゃない。自分のためだけに行ったの。

麻由美 それは自分が助かりたいって気持ちもあったかもしれない、でも美里を助けたって気持ちもあったよ。

母 そんな気持ちはない！

麻由美 どうしてわかるの！

母 亜美は私がつくった子だから。

麻由美 …

母 麻由美、どうして亜美を助けたいの。

麻由美 …私、亜美だから。

母 ？！

麻由美 私もママがつくった子。だから私のことも全部わかる？

母 …

麻由美 わかるんでしょ、ママ！

母 麻由美、どうしたの…

麻由美 私、書き込んだじゃった。

母 …

麻由美 私、書き込んだじゃったの。ほんの軽い気持ちで、クラスの友だちの悪口。

母 …

麻由美 そしたら、書き込みが一気にエスカレートしちゃって。その子、私に死にたいって相談してきて… 「ごめん」って謝りたいけど、もし最初に書き込んだのが私だってわかったら、ほんとに死んじゃうかもって思って… どうしたらいいかわからなくて…

母 …

麻由美 だからつらかった。ママのラストが。

母 麻由美…何で言ってくれなかったの。

麻由美 言おうとした。でも、ママ、全然聞こうとしてくれなかった！

母 …

麻由美 ママ、亜美は私なの。私は亜美なの。

麻由美は泣いている。

母は、しばらく泣いている麻由美を見つめている。

母が先ほど書いたラストの構想を見つめる。

母は突然、そのペーじを破り取りメモ書きを丸めて床に投げ捨てる。

麻由美 ママ…

そして、新たなラストシーンをコンピュータに打ち込んでいく。

麻由美がそのラストシーンを読み始める。